

(2023.10.15.)

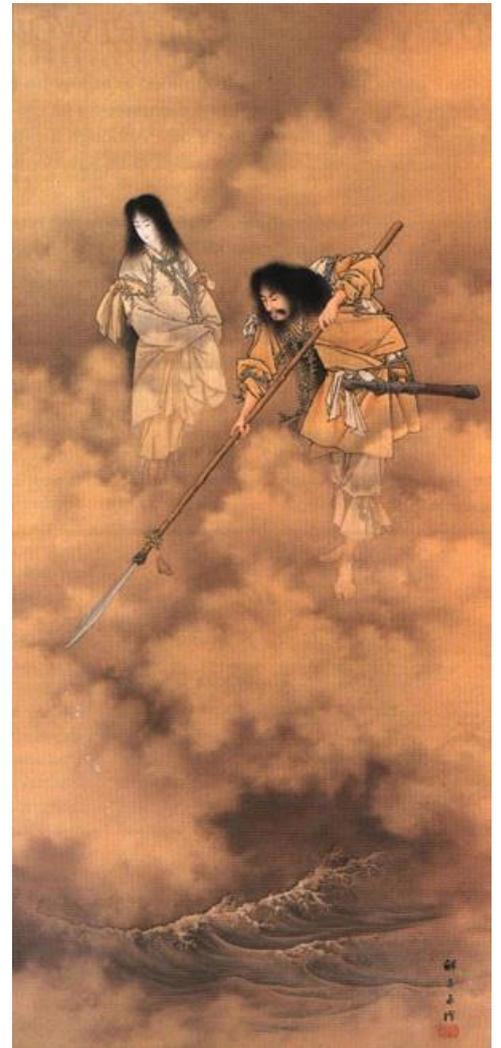
兵庫史を歩く No.40 国生み神話の「おのころ島」はどこだ？

沼 島 (ぬしま)

国生み神話とは？

日本最古の歴史書である「古事記」「日本書紀」には日本のはじまりについて、次のような記述がある。

遠い昔、澄み渡った高い空の上に高天原という神々のお住まいになっている所があった。ある時、神々が話し合われ下界に新しい国を造ることになった。そこでの伊弉諾尊と伊弉冉尊二柱に天の沼矛という矛を与え、国造りを命じました。伊弉諾尊と伊弉冉尊は天の浮橋という天からの階段に立って下界を見下ろして、天の沼矛を海中へ入れて海の中を掻き回した。そして矛を引き上げると、矛の先からしずくがしたたり落ち、それが固まって「於能凝呂島（おのころじま）」という島になった。伊弉諾尊と伊弉冉尊はその島に降り立つと、大きな柱を建て、そのまわりに八尋殿（やひろでん）という神聖な御殿を建てた。その御殿で二神は結婚し、まず淡路島を造り、次に四国、隠岐島、九州、壱岐島、対馬、佐渡島をつぎつぎと生み、最後に本州を生んだ。八つの島を生んだことから、これらの島々を大八洲（おおやしま）と呼ぶようになった。これが日本のはじまりとされている。



「おのころ島」は一体どこにある？

「おのころ島」の位置については、「邪馬台国」同様に古くから議論されており、様々な説があり、伝承地も多い。主な伝承地としては、沼島、榎列のおのころ島神社、岩屋の絵島、友が島、家島などがあるが、その主なものは淡路島内またはその近辺である。もっともこれは架空の島であるとする説も当然ながらある。

今日は有力な候補地である沼島と榎列のおのころ島神社を訪れる。

なぜ「おのころ島」が淡路島近辺なのか？

国生み神話のルーツは淡路島の人々が語り伝えていた神話にある。

淡路島には古くから漁業や製塩、海運などに従事した海人（あま）が住んでいた。その海人たちが信仰していた神が伊弉諾尊と伊弉冉尊であり、彼らが持っていたのが二神によって淡路島や周辺の島々が造られたという素朴な島生みの伝承であった。

この海人たちは、やがて天皇家を中心とした大和政権の支配下に組み込まれ、天皇家へ食材を貢納したり、天皇の命で水手をつとめたりするようになる。このような関係を通じて、淡路の伝承が天皇家に伝わり、天皇家のもつ神話に取り入れられて、日本列島を生むという壮大な神話に構成されていったのであろう。

(1)おのころ島神社

数千年前の縄文時代には、おのころ島神社周辺の平野部には入江が広がり、境内の丘はかつては海の中に浮かぶ小島であったといわれる。その小島が伊弉諾尊と伊弉冉尊の二神による国生みの舞台となった「おのころ島」とであると伝えられ、古くから親しまれ、崇拝されてきた。

現在では縁結びや安産などにご利益があるとされている。



① 赤い大鳥居



現地ですぐ目にはいるのは、南向きの高さ 21.7m の大鳥居である。昭和 57 年（1982）3 月に建立され、7 階建てのビルに相当する。平安神宮と巖島神社とならび「日本三大鳥居」の一つとされている。

これまでに平成 9 年（1997）と平成 24 年（2012）に塗り替え工事を行っており、今回は今年塗り替え工事が予定されているとか。

② 三鈷の松

鳥居のすぐそばに大きな松の木がある。通常松葉は二つに分かれているが、この松葉は三つに分かれている。とても珍しく、縁起物とされている。

神社にお参りするには順番が定められている。それに従おう。

拝殿 → 御神木 → 八百万神社 → 鶴鶴石(せきれいいし)

③ 拝殿・本殿

石段を登ると拝殿とその奥に本殿がある。本殿は伊勢神宮と同じ神明造であり、鯉木が8本ある。

(ちなみに伊勢神宮の内宮の鯉木は10本、外宮は9本である。)

石段の下には「千度石」石段の上には「百度石」がある。

また、江戸時代前期の俳人で蕉門十哲の一人である服部嵐雪の句碑がある。この辺りの出身とか。



「梅一輪いちりんほどのあたたかさ」

④ 御神木

本殿の右側に覆堂があり、その中に御神木として古い枯れ木が横たわった状態で祀られている。左の大きな枯れ木が男松（おん松）、右の細い枯れ木が女松（めん松）である。立派な松の木は明治時代以前に枯れてしまったそうである。



⑤ 八百萬神社



本殿の奥にあり、朱色の燈籠が規則的に並んだ雰囲気の良い参道を進んだ所にある。伊弉諾尊と伊弉冉尊の御子神をお祀りしている。御子神といっても全部で35柱もあるとか。

⑤ 鶴鴿石(せきれいし)

伊弉諾尊と伊弉冉尊はこの石の上につがいの鶴鴿が止まり、夫婦の契りを交わしている姿を見て夫婦の道を開かれ、国生みをされたと言われている。その鶴鴿の仕草が現在も神前結婚式の三・三・九度に受け継がれている。



(御参りの仕方)

- ・新しい出会いを授かりたい場合は白→赤の順に縄を握り、祈る
- ・今の絆をより深めたい場合
 - ・二人で来た場合は男性→赤、女性→白の縄を握り、手を繋いで祈る
 - ・夫婦どちらか一人で来た場合はまず赤い縄のみを握り、次いで白い縄のみを握り、その後祈る

⑥ 天の浮橋



伊弉諾尊と伊弉冉尊が初めて降り立った場所であり、神々の世界と地上の間に架かっていたとされている。

神社から西へ 400m ほどの所にある。

(2) 沼島

沼島も伊弉諾尊と伊弉冉尊の二神が地上に降り立ち、国造りを始めた「おのころ島（自凝島）」伝承の候補地の一つである。実際に島を訪れてみると、この島が最有力候補地のように思われてならない。

沼島は面積 2.7 km²、周囲 10km 弱で、最高地点 117.2m の小島である。淡路島とは船でわずか 10 分の距離であるが、間を中央構造線が走っており、両者の地質は全く異なる。淡路島側は 8000 万年前、沼島側は 1 億年前の地層で構成されている。沼島には激しい地殻変動の痕跡があり、「地球のしわ」とも呼ばれる「鞘型褶曲（さやがたしゅうきょく）」が発見されている。これは干潮時しか見ることができないが、沼島汽船沼島待合室にその一部が展示されている。昔の地殻変動の動きがわかる世界的にも極めて珍しいものであり、世界では他に仏で一か所発見されているのみである。



「沼島は小さい。ほとんど岩礁の大なるものという程度の小さな島の住人ながら船や船具、操船、航海に独自の開発をするところが多く、しかも、豊臣期からはるか対馬沖にまで行って操業するという気概をもっていた。島の近くには鳴戸の瀬戸があり、あるいは由良の瀬戸があつて、潮と風と浪という地球の機微のなかで最もやっかいなものについては、卓越した知識をもっていた。世界中で小島の住人は多いが、沼島の衆ほどに気概と高い能力をもっていた海の民はまれなのではないか。」

---司馬遼太郎 「菜の花の沖」より---

① 上立神岩

高さ 30m の矛先のような形をした奇岩で、地元では「立神さん」と呼ばれ親しまれている沼島のシンボルである。

国生み神話ゆかりの場所で、伊弉諾尊と伊弉冉尊が天の浮橋で海を掻き混ぜた「天の沼矛」とも、あるいは、二神がおのころ島に立ち、巨大な柱の周囲を回って婚姻を行ったという「天の御柱」とも言われている。

上立神岩は中央にハート型に見える窪みがある。窪みがハート型に見えたカップルには夫婦円満や恋愛成就のご利益があるとか。



この上立神岩と対をなすものとして、下立神岩がある。昔は上立神岩より高かったが、安政大地震により中ほどから折れたと伝えられる。岩の中心付近に穴があいた珍しい形状であったが、昭和 9 年（1934）の室戸台風により破壊され、現在では巨大な根っこの部分だけ残っている。ユーラシアプレート（伊弉諾尊）と太平洋プレート（伊弉冉尊）がぶつかり合って 1 億年前に沼島が最初に誕生したと考えれば、国生み神話と日本列島誕生の歴史が不思議に結びつくような気がする。

② 八角井戸

後醍醐天皇の皇太子のお妃が沼島に漂着した時に使われた井戸との伝説がある。沼島では井戸のことを川と呼ぶ。この川は王川と呼び、生活用水として今も大事にされている。八角の形は中国の占いによると、吉相を示している。

③ 梶原五輪塔



永禄から天正初期にかけて島主として沼島水軍を支配していた梶原一族の祖梶原景時の墓といわれている。

梶原景時は源平の石橋山の合戦では平家方として源頼朝の軍を破ったが、洞窟に潜んでいた頼朝を故意に見逃した。後に源氏が復活した際に、頼朝方につき頼朝が死ぬまで側近として勢力を握った人物である。

④ おのころ神社(自凝神社)

小高い山の上にあるおのころ神社には、天地創造の神である伊弉諾尊と伊弉冉尊の二神を祀っている。地元ではこの山自体を「おのころさん」として大切にしている。山上に向かって続く 100 段あまりの階段は真っ直ぐに伸び、まるで天に届くようである。

神社自体はとても簡素である。拝殿も本殿も飾り気無く、澄んだ空気だけがここにはある。まさに神聖な場所である。



⑤ 沼島八幡神社



島の中心に位置しており、永享 8 年 (1436) に梶原景俊が京都石清水八幡宮の分霊を勧請して創建したと伝わり、海上安全、四季豊漁の神様である。

御影石の石段が、神門から上が 33 段の女坂、下が 42 段の男坂と呼ばれる。

本殿には、かつて沼島水軍の拠点であり、昔から海を生活のよりどころとしてきた沼島の生活をうかがい知る絵馬 13 額が掛けられている。また全国的にも珍しい逆羅針盤が天井に奉納されている。

さらに正面に賤ガ岳合戦の絵馬がかかっている。この絵馬の主人公は七本槍の一人脇坂安治である。彼は後に淡路国洲本藩主となったが、主な任務は大阪湾という海路を守ることであった。そのため彼は沼島を大切にし、彼の指揮のもと沼島水軍は朝鮮の役にも出兵した。この経験を活かし、沼島の漁民は遠く東シナ海まで船団を組んででかけた。その結果沼島は豊かな島になった。脇坂安治に感謝するため沼島底引網組合が、この絵馬を奉納している。

⑥神宮寺(じんぐうじ)

平安時代の元慶4年(880)開基の真言宗寺院であり、源頼朝の重臣として有名な梶原景時を含む梶原氏の菩提寺である。

本堂裏手には兵庫県指定名勝である独創的な石組の枯山水の庭園がある。傾斜地を利用し、岩盤を生かした築山式の枯山水の庭園であり、沼島特有の結晶片岩を「人」の字形に組み合わせて多用する技術は迫力がある。



また、既述の司馬遼太郎の石碑もある。

⑦弁財天神社

沼島に上陸すると真っ先に眼にするのは黒松に覆われた社である。社名は巖島神社であるが、弁財天神社と通称されている。島では「弁天さん」の名で親しまれている。海上安全、戦の武神、守護神として信仰されている。

境内の周囲は沼島の岩石を使用した石垣で出来ており、ここで主な沼島の岩石を知ることができる。



(次回予告)

2023.11.23

兵庫史を歩く No.41 丹生山田の里をめぐる

栗花落の井～無動寺～箱木千年家

箱木千年家をはじめ八つの重要文化財を訪れる

